

自立した主権者をめざして

▶ ▶ ▶ Vol.3 コモンズをつくろう！

KEYPOINT

- 日常生活の中にあるファシズム
- 形を変えたファシズム「新自由主義」が蔓延する日常
- コモンズをつくるということ

SUMMARY

今月、機関紙一面で皆が注目したのは「デモクラシーの中に住みついたファシズム」というワードでした。ファシズムとは何か。通常感覚では戦前の軍国主義やナチスドイツのイメージ。でも、現代日本にも形を変えたファシズムが存在する。それが「新自由主義」という概念であるということから、その「新自由主義」が私たちの日常生活にどれほど入り込んでいるかについて、話し合いました。

私たちが「ファシズム」を感じる時

三島憲一・大阪大学名誉教授は「デモクラシーの中に住みついたファシズム」について、例えば政権であれば「理由と根拠を挙げての自由な議論をやめて、『国民のために』上で決めること」と述べています。では私たち自身はこの「ファシズム」をどんな時に感じるのかというところで、「あるテーマについて、一方的な視点の情報しか集めず、そのことの正当化だけを主張すること」や、「デジタル技術を使って管理、監視することを「安全の提供」という言葉にすり替えて実行すること」などの例が挙げられました。

また、こうした例にとどまらず、新型コロナによってさまざまな不自由が生じた結果、「目の前の暮らし」というところにどうしても焦点が絞られる。そして焦点を絞っていけば絞っていくほど余裕がなくなり、周囲が見えなくなる結果、上からかぶさってくるものに対してどうでもよいという話に流されていくとう意見も出されました。機関誌では、そうした抑圧を「受ける」側の人間が、「まあ、いいか、そんなに悪くはないだろう」と**自発的隷従に至る「空気」**が問題であるとも伝えています。

新自由主義という新しいファシズム

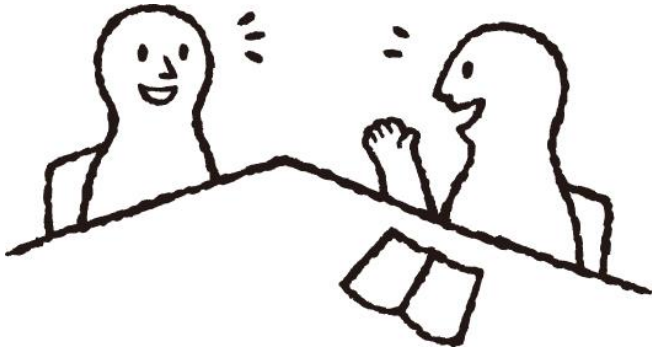
上記のような例が「ファシズム」であるとするならば、私たちがイメージしてきたいわゆる軍国主

義的な概念ではなくなります。ここにあるのは新自由主義。これがいわば**新しいファシズム**として日常生活に蔓延しているとの問題提起から、次に自分たちの活動の中で感じる「新自由主義」の話題に移りました。

これには、地域のボランティア活動において、活動をする人たちの「目的」ではなく、活動そのものを「効率よく」動かすことが優先されるという話や、教育の現場において、子ども達の問題行動が起こらないようにするための「教育環境の改善」ではなく、子どもたちの「問題行動自体を改善」することで教育環境をよくするところに目標を定めてしまうことなどが出され、各自が行う様々な活動のどんな分野でも思い当たることあるのだということが分かりました。

私たちの活動だけでなく、日常生活のあらゆる場所にこのような新自由主義的な側面が見受けられます。この新自由主義から脱却するためには、何気ない生活の中においても、意見を発する側も受ける側も、常に、自分の主張は間違っているのではないかと、自分と全く違う考え方をする人はなぜそう思うのかといったことを拒否しないで知ってく。

そして「上からの決定」を安易に受け入れるという空気をかえていく必要があり、そのために異なる立場の人たちと接し、話し合う場をつくっていくことが大切です。



コモンズ — 考える場— に求められる「共通の言語」

また、そのような「場」を作る際に要となるのが「共通の言語」であるということが、話し合いの中でキーワードとして出されました。同じ言葉を使っている、それぞれで認識が違っていれば話し合いが進みません。例えば、子育てのしやすい地域とは何か、という話題の中で、子育てを「モノ（便利なサービスを利用して育てる）」として考えるか、子育てを「コト（どんな人間に育てたいかを実現できる環境や人間関係を考慮して育てる）」との認識の違いがある。すると目的である「子育てのしやすさ」のイメージを共有することができず、具体的なアイデアや要求をだすことができなくなります。他にも「問題行動を子どもが起こす」ことについて、「なぜ（問題を）起こすのか」という問題意識と、「どう（問題を）起こさせなくするか」とでは、原因の究明や解決策の決定が変わってきます。

この問題を解消するためには、自分の考えや気

持ちを公開し、説明し、人と共有することで関係を結び、議論の場や意見を自分が考えて出していく場所をつくり出すことが望ましく、それが「**コモンズをつくる**」ということ。このコモンズを沢山つくるのが共通の言語を作り出すことにつながるのではないかという意見が出されました。しかし、このコモンズをつくるということは、並大抵のことではありません。同じ考えの人たちだけ、好きな人たちとだけ話し合いをしていればよいわけではなく、明らかに考え方が合わない人とも接していかなければなりません。場所や相手、人によって違ってきます。その時、自分とは異質なもの、弱者を切り捨ててはいけない等一見つらく面倒な作業に思えるけれど、必ず最後にあるのは苦しみだけではなくて喜びである。だから、まずは「考えるということ」を共通の認識とし、自分が成長した、相手も多分進んでいるということが実感できるようすすめていくという結論となりました。

〈機関紙「日本再生」No.498の内容〉

2020/11/01 発行

消費者民主主義の破局に備え持続的な未来への選択肢とその担い手をどう準備していくか ●2-6.11 面/一灯照隅/コロナ禍での“くらしとせいじ”、●6-9 面/インタビュー/日米関係・新たな視点/三牧聖子・高崎経済大学准教授 ●9-11 面/インタビュー/本格的な野党としてのスタート/泉健太・立憲民主党政調会長※ 機関紙「日本再生」のご購読をご希望の方は下記の連絡先までご連絡ください。

一緒に
考えてほしいこと

あなたの周囲に「コモンズ」はありますか？
「コモンズ」をつくるにはどうしたらよいと思いますか？

【連絡先】「がんばろう、日本！国民協議会」埼玉読者会

住所：埼玉県越谷市大里 226-1 白川ひでつぐ事務所

担当：吉田理子

ganbarou.r.a.saitama@gmail.com

がんばろう、日本！HP 埼玉読者会 note



がんばろう、日本！国民協議会は、「国民主権の発展」「人づくり」「がんばる日本と日本人を回復する国民運動」「自由・民主」東アジアの社会的リーダー層のネットワーク構築および日米同盟の再定義」を目的として活動している団体です。機関紙「日本再生」および各種資料の発行や、例会、定例講演会などの開催、また国民的課題、地域的課題への取り組みなどを行っています。